

成人学習者による日本語の助詞習得を促すもの — 文法機能か意味役割か —

佐藤 豊

【キーワード】

中間言語、ガ格、ヲ格、主題の「ハ」、意味役割

【和文要旨】

先行研究が明らかにした日本語学習者による助詞使用の正用順序から、談話上の機能「主題」・文法上の機能「目的語」・意味上の機能「対象」が助詞習得に特に影響を及ぼすと想定することができる。本論文では、特に「目的語」と「対象」という点に焦点をあて、どちらの要因がより大きな影響を及ぼすかを検証した。

3レベル（ACTFLによる初級、初中級、中中級）の日本語学習者（英語母語）12名の発話と日本人OPI採点者の発話から動作主・経験者・対象の3種類の項を取り出し、それらがどのような頻度でどのような音形として出現するかを調べ、VARBRULを用いて目的語であるという因子と対象項であるという因子の因子比重を比較した。すると、対象の因子比重は学習者も日本人も同じ値で最も高かったのにもかかわらず、学習者の目的語の因子比重は日本人のそれに及ばなかった。つまり、学習者にとっては、目的語であるという因子よりも、対象であるという因子のほうが助詞マーキングに大きな影響を及ぼしていることがわかった。

このことから、先行研究において指摘された「状態述語」の目的語の「ガ」が難易度が低い（坂本 1997）という点や、ヲ格のほうがガ格よりも正用順序が高い、あるいは目的語のガ格のほうが主語のガ格よりも正用順序が高いという点は、対象項が助詞習得に影響を及ぼしていることを反映した結果ではないかと論ずる。

成人学習者による日本語の助詞習得を促すもの — 文法機能か意味役割か —

佐藤 豊

1. はじめに

成人日本語学習者による助詞習得（「ハ、ガ、ヲ」等）は、誤用分析の時代から中間言語研究の時代に至るまで、最も人気のあるトピックの一つであり、その習得順序あるいは正用順序（accuracy order）についてある程度明らかになってきた。現在までの助詞習得研究から得られた結果を概観すると、たとえば助詞「ハ、ガ、ヲ」の正用順序に関して(1)のようなことがわかっている。（「X>Y」は、ある時点においてXがYより正用率が高いこと、つまりXがYより正用順序が高いことを示す。）

- (1) a. 「ハ」・「ヲ」>「ガ」
b. 目的語の「ガ」> 主語の「ガ」

まず、(1a)に示したように、「ハ」「ガ」「ヲ」の正用順序に関しては、多くの研究結果が、殆ど一様に助詞「ハ」か「ヲ」のほうが助詞「ガ」よりも、正用率が高いと報告している（井内 1995、猪崎 1995、石田 1991、Doi & Yoshioka 1990、Yagi 1992、1996、横林1994、Yoshioka 1991）。例外的に、松田・斎藤（1992）の調査においては、2名の韓国語母語話者からの縦断データに基づいて、ガ格使用の正用率のほうがヲ格正用率よりも高かったと報告している。

「ハ」と「ヲ」の正用順序に関しては、研究成果がわかれるところである。「ハ」のほうが「ヲ」より正用順序が上であるという調査報告がある（猪崎 1995、Doi & Yoshioka 1990、小森・坂野1988、Yagi 1992、1996のグループ1、Yoshioka 1991の初級）。一方、「ヲ」のほうが「ハ」より正用順序が上であると報告する研究もある（井内1995、石田 1991、八木1996のグループ2、Yoshioka 1991の中級、横林1994）。この2通りの正用順序について、八木（1996）は、初級前期において正用順位は「ハ>ヲ>ガ」で、初級中期以降において「ヲ>ハ>ガ」になるのではないかと考察している。しかし、井内（1995）は、初級者を縦断的に調べたところ、八木とは反対に「ヲ>ハ>ガ」の正用順序を示す調査結果を得たので、初級において「ヲ>ハ>ガ」の正用順序が見られ、後に「ハ>ヲ>ガ」に変るのではないかと予測している。つまり、「ハ」「ヲ」に関する2通りの正用順序が何に起因するのか、現在のところ明らかではない。

次に、(1b)に示したように、目的語に付いたガ格の用法と主語に付いたガ格の用法を別個に計算して正用率を出したところ、目的語のガ格の正用順序のほうが高いという結果を得ている（小森・坂野 1988、Doi & Yoshioka 1990、Sakamoto 1993、八木1996）。

花田(1994)も、多数の目的語のガ格を含む「慣用」という項目と、それ以外のガ格を比較し、「慣用」のガ格のほうが正用率がずっと高かったと報告している。また、山中(1995:72)は「状態の対象を表す」ガ格が初期から使用されているのに対して、「動きや状態の主体を表す」ガ格は初級から中級にかけてあまり使用されていないと記している。例外としては、Yoshioka 1991が目的語のガ格の誘出模倣テスト(elicited imitation test)の正答率が主語のガ格よりも低かったことを報告している。

(1)の正用順序結果と多少重複するが、坂本(1997)が(2)に示すように「ハ、ガ」に限り先行研究からの成果を簡潔にまとめて学習難易度を表している。下の機能分類は、多くの先行研究がそうであるように、久野(1973)の機能分類に基づいている。(3)に久野の機能分類の例文を示す。

(2) 坂本(1997) 学習難易度表

易	<----->	難
状態述語の目的語の「ガ」	中立叙述の「ガ」	総記の「ガ」
主題の「ハ」		対照の「ハ」
		従属節内の「ガ」

(3) 久野(1973:27-28)による「ハ、ガ」の機能分類

- 「ハ」 a. 主題：太郎は学生です。
 b. 対照：雨は降っていますが、雪は降っていません。
- 「ガ」 c. 総記：太郎が学生です。
 d. 中立叙述：雨が降っています。
 e. 目的語：僕は花子が好きだ。

(2)の表の左端の機能(状態述語の目的語の「ガ」、主題の「ハ」)が学習難易度が低く(つまり学習しやすく)、右端の機能(総記の「ガ」、対照の「ハ」、従属節内の「ガ」)が難易度が高く、中立叙述の「ガ」はその中間ぐらいの難易度だということである。

(1)(2)に示した先行研究の結果から、以下のような予測をたてることができる。

- (4) a. 助詞「ハ」が格助詞「ガ」よりも正用順序が高いこと((1a))と、主題の「ハ」の難易度が低いこと((2))から、学習者は談話機能上の概念「主題」性を手がかりに、助詞「ハ」を習得する。
- b. ヲ格がガ格の助詞より正用順序が高いこと((1a))、目的語のガ格が主語のガ格よりも正用順序が高いこと((1b))、同様に、状態述語の目的語の「ガ」の学習難易度が低いこと((2))から、学習者は文法機能上の概念「目的語」を手がかりに、目的語の助詞「ヲ」「ガ」を習得する。
- c. bに挙げたものと同じ理由から、学習者は意味機能上の概念「対象」を手がかりに、目的語の助詞「ヲ」「ガ」を習得する。

つまり、学習者の日本語の助詞習得に影響を及ぼすものとして、(i) 談話上の概念「主題」、(ii) 文法上の概念「目的語」、(iii) 意味上の概念「対象」の3つを考えることができる。

本論文では、(i)~(iii)の3つの機能のうちどれが助詞習得に最も影響を及ぼすかを検証するものであるが、(i)の談話上の機能主題性に関しては先行文献からの考察にとどめ、特に文法上の機能と意味上の機能のどちらが助詞習得に関与するかを検証する。以下においては、まず、学習者が主題性と助詞「ハ」を結び付けているのかどうかを論じ、次に、文法的機能「目的語」と意味的機能「対象」がどのようなものであるかを明らかにし、最後に、調査の手順・結果・考察について論じる。

2. 助詞習得にかかわる3つの機能について

Chaudron & Parker (1990) は、定性 (definiteness) を表す名詞句形の習得が不定性 (indefiniteness) を表す名詞句形の習得に先行する例として、Doi & Yoshioka (1987) の実験に触れ、その実験結果により主題「ハ」の習得が主語・目的語マーカー (「ガ・ヲ」) の習得に先行していることが認められたとしている。しかし、主題性が言語形式の習得一般にどのように関与するかという議論とは別に、日本語学習者が助詞「ハ」という言語形式と主題性をどれだけ結び付けているかということについては疑問が残る。なぜなら、総記の「ガ」の学習難易度が高いこと ((2)) が示しているように、学習者が総記の「ガ」を使うコンテキストで「ハ」を使ってしまうという誤用が少なくないのである。総記の「ガ」とは、典型的に疑問詞 (「だれが学生ですか。’)あるいは疑問詞の答え (「太郎が学生です。’) に接続して現われるように、主題の「ハ」とは全く異なる談話機能を持つ。それにもかかわらず、中・上級日本語学習者に、文脈を添えた「ハ・ガ」二者択一の問題を与えても、総記の「ガ」に関する問題の正答率は非常に低いのである。

例えば、田村 (1994) は広島大学で上級の日本語クラスを受講する学部留学生6名、日本語日本文化研修生11名、および大学院レベル研究生2名を対象に(5)のような「ハ・ガ」二者択一の問題を与えた。問(2)には、明示的な疑問文が現われているが、それに対する正答率は73.9%でしかなかった。暗示的な疑問文がある文脈では、さらに正答率が低く、問(12)の正答率は約60%で、問(18)の正答率は約27%であった。

(5) 田村 (1994) (総記の解答が期待される () 内に関して正答率を示す。)

(2) どの方 () 山下先生ですか。あの方 (73.9%) 山下先生です。

(12) 留学生のなかでは、トムさん () いちばんハンサムですか。いいえ、ケントさん (約60%) いちばんハンサムです。

(18) ここから富士山が見えますか。ええ、あれ (約27%) 富士山です。

花田 (1994) も、同様なハ・ガ二者択一の問題を、日本語学習歴1~3年の中国人19名と

欧米系学習者17名に対して行った。その結果、疑問詞に対して答えるところで、「ハ」ではなく正しく「ガ」を選んだ者は、中国人学習者では38%、欧米系では54%しかいなかった。

上記の「ハ」「ガ」の二択式問題では正解率が50%に近かった。つまり、正答を偶然選んだ確率(chance level)に非常に近く、中・上級になっても実は「ハ」の主題性というものが明確にとらえられてはいないのではないかということを示唆している。主題機能ではないところで「ハ」を使ってよいかどうかわからないということは、彼らが「ハ」を主題のマーカースとしてとらえているとは考えられないということを示す。ということは、「ハ」の正用率が高いのは学習者が「ハ」を主題のマーカースとして使用していたからではなく、他の理由によるのではないかと思われる。いずれにしても、坂本・町田・中窪(1995: 83)が超級日本語話者の助詞の使用に関して報告しているように、「どの先行研究にも主題・トピックの「は」は割と習得しやすいと報告されているが、最終的に一番最後まで残る難しい用法…」だと思われるのである。

以上から、本論文では、主題性が「ハ」習得に大きく影響を及ぼすという可能性を排除して、文法上の機能と意味上の機能のどちらが助詞習得に影響を及ぼすかに焦点をあて検証したい。しかし、その前に、なぜ(4b)(4c)で同じ根拠にたちながら2つの異なった結論に達しているかを論じる。

助詞習得に文法的な機能が影響を及ぼすと考えられる根拠と、意味的な機能が影響を及ぼすと考えられる根拠は自ずから異なるものになると思われる。久野(1973)は、(3e)の分類は意味役割「対象」の用法としてのガ格を指すものではなく、文法上機能としての目的語のガ格を指すものだと強調している。これは、「対象」という意味役割を持つガ格を論じるなら、(3e)のような目的語のガ格を論じるだけでは不十分だからであろう。言語学で意味役割「対象」を論じる時は、文法機能から切り離してなされ、目的語とならんで主語の中にも意味役割「対象」を持つものがあることが認められている。しかし、今まで文法機能から離れて純粋に意味役割の助詞習得に対する影響を考察するというアプローチはとられなかった。たとえば、八木(1996)、横林(1995)等は、(3e)の目的語のガ格の用法のみを意味役割「対象」として論じ、主語のガ格で対象という意味役割を持つものは論じていない。

対象項とは、ヲ格の用法全てを指すものではなく、ヲ格には(6)の(a)(b)のような対象以外の意味役割を持つものがあることは、日本語教育でも区別されているところである。(c)のようなヲ格や(d)のようなガ格は対象項として日本語教育でも認められているが、日本語の意味役割について従来の分類をまとめた国研1977によると、(e)(f)のような主語のガ格も対象項として含まれている。¹⁾

(6) 意味役割と格と文法機能の対応 (国研は国研 1997を指す)

例	格	文法機能	意味役割
(a) 道ヲ まっすぐ 行く	ヲ	?	通過 (Path)
(b) 部屋ヲ 出る	ヲ	?	起点 (Source)
(c) たんぽに 柵ヲを 作って (国研)	ヲ	目的語	対象 (Theme/Patient)
(d) りんごガ 好きだ	ガ	目的語	対象
(e) 芽ガ 出た (国研)	ガ	主語	対象
(f) 上だけガ 明るい (国研)	ガ	主語	対象
(g) 犬ガ 走る	ガ	主語	動作主 (Agent)
(h) 頼光ガ 不思議に 思って (国研)	ガ	主語	経験者 (Experiencer)

ここで扱われている「対象」とは、動作・心情等の対象であるとともに、何らかの変化を被るもの、ある空間に存在するもの、あるいは、ある属性を有する存在等を指すものとしてまとめられている。そして、「対象」は意味役割「動作主」「経験者」等と対立する。²⁾ そのような観察から、(c)～(f)の項 (argument) は、(g)(h)の項とは異なる「対象」という意味役割を持つと考えられる。

(4b)の予測は、(c)(d)を(e)～(h)と対立させて観察した結果得られたもので、文法機能上の相違に注目している。しかし、従来の(4c)の予測も、(c)(d)を(e)～(h)と対立させて観察したものの結果に基づくもので、真に意味役割上の相違を反映している予測ではなかった。すなわち、(4b)と(4c)を検証するためには、(c)(d)対(e)～(h)の影響の相違と、(c)～(f)対(g)(h)の影響の相違を比較することが必要になると思われるのである。

3. 調査の手順

本調査においては、以下の24名の発話中の3種類の項「動作主」「経験者」「対象」がどのような音価をもって現われるか、またどのような頻度で現われるかを調べた。

(7) 被験者³⁾

	英語母語話者の学習者	日本人 OPI 採点者
Novice Mid (NM)	2名	2名
Novice High (NH)	2名	2名
Intermediate Low (IL)	4名	4名
Intermediate Mid (IM)	4名	4名

データ処理には、JCHAT/CHILDES (MacWhinney 1995; 大嶋・マックウィニー 1995) のデータ検索用に開発されたCLANを使用し、上記の3種類の項をガ格、ヲ格、ハ・マーキング、助詞脱落形、空項、その他(ニ格、ト格、「モ」等)に分類した。ただし、その

際挨拶表現等は除いた。

格助詞のみならず助詞「ハ」等によりマークされた動作主、経験者、対象に対応するものも、本研究では項として扱った。また、助詞脱落形とは、(8)の「その本」に見られるように、助詞が脱落したものを指す。

(8) 太郎が その本 買った。

最後に、空項 (null arguments) とは、(9)の下線に表されるように動詞「買う」の項構造<動作主、対象>から期待される意味役割 (動作主) が音声として現われないような場合を指す。この場合ゼロの音価を持つ項が存在するとして考え、空項と呼ぶ。⁴⁾

(9) ____ 本を 買った。

従来の調査方法である正用率を離れて、頻度に基づいて助詞習得の発達を予測するために以下の前提を仮定する。(NNSは学習者 nonnative speakers、NSは日本人採点者 native speakersを指す。)

(10)

- a. NNSの場合、助詞による名詞 (句) マーキングを、構造的・機能的な複雑さ (どの助詞を機能のために使うかわからない) から、回避しよう (avoidance, Schachter 1974) とする。
- b. しかし、そのような回避方略 (avoidance strategy) がとられない限り、NNSもNSも被面接者と面接者という違いがあっても、その発話には同じぐらいの割合の助詞マーキングが出現すると想定される。
- c. NNSの助詞マーキングの割合は、レベル上昇に従ってNSの割合に近づく。

本研究では、日本語においては話し言葉における特殊な場合 (Fukada 1993; Masunaga 1988) を除いては、機能語 (助詞) によって名詞句をマークするということを、学習者がどのように習得していくかという構造面に焦点をあてて探る。そのため、その用法が目標言語 (TL) に照らして正しいかどうかは考慮せず、そのような機能語による名詞句マーキングが、文法的な機能に大きく影響されるか、意味的な機能により大きく影響されるかという点に注目する。

本研究で検証することは、(11a)に挙げられた従属変数が、(11b)に独立変数として挙げられた様々な因子 (factors) からどのような影響を受けるかを検証するところにある。意味役割の動作主と経験者は、外項 (external argument) としてまとめて、対象項 (内項 internal argument の一つ) とどのように対立するかを見る。

(11)a. 従属変数 (dependent variables)

- ① 助詞によりマークされている (ハ、ガ、ヲその他の助詞によりマークされている)。

② 助詞によりマークされていない (助詞脱落、空項)

b. 独立変数 (independent variables)

① 日本語学習者のレベル：ア. 初級 (Novice)、イ. 初中級 (Intermediate Low)、ウ. 中中級 (Intermediate Mid)

② 文法機能：ア. 主語、イ. 目的語

③ 意味機能：ア. 対象、イ. 外項 (動作主、経験者)

4. 結果と考察

(7)に挙げた者による各20分位のNNSとNSとの12の会話から、NNSに関しては1820の項を、NSからは1678の項を取り出した。

まず、(10)に挙げた仮説を調べる。表1に示したように、助詞マーキングの有無の比率を見ると、NSの場合、どのレベルでも37~40%の助詞マーキングの項と63~60%の助詞なしの項が出現している。一方、NNSの場合は、助詞マーキングの率が初級では少なく、19% (初級) → 31% (初中級) → 37% (中中級) というようにレベル上昇とともにTLの比率に接近していった。

表1. 話中の助詞マーキングの比率、対象・外項の比率、目的語・主語の比率 (%)

	NNS		NS		NNS		NS		NNS		NS	
	助詞あり	助詞なし	助詞あり	助詞なし	対象	外項	対象	外項	目的語	主語	目的語	主語
初級	19	81	37	63	35.8	63.4	37.2	62.6	24.3	75.7	27.9	72.6
初中級	31	69	37	63	36.9	63.2	32.4	67.6	25.9	74.2	29.8	70.3
中中級	37	63	40	60	32.3	67.7	30.2	69.8	31.5	68.4	32.7	67.2

また、対象項と外項の割合、及び目的語と主語の割合を比較した場合、どのレベルに関しても、NNSとNSの比率が非常に近いことが表1から見て取れる。対象項の割合は大體発話の3分の1であり、目的語の出現率は、初級・中級においては4分の1強であり、中中級ではそれが3分の1弱に増加した。つまり、対象項や目的語はNNSもNSも同じ割合で出現したが、助詞マーキングの率だけが初級、初中級のNNSの発話においてTLよりも少なく出現したと見ることができる。このことから、(10)の仮定は支持されたと考えよう。

Chaudron & Parker (1990) は、学習者の英語における名詞句の冠詞によるマーキングを調べ、同様な傾向を認め、この傾向を構造的有標性 (structural markedness) により説明している。表2にあるように、名詞句が空項 (null)、冠詞の付かない名詞句 (bare noun/pronoun)、冠詞の付いた名詞句 (Noun + Def/Indef Art.) のうちのどの形態で出現するかを調べたところ、空項は殆ど現われなかったが、冠詞の付かない名詞句の割合が下のレベルで高く、空項の出現率はレベルを追って減少していった。反面、下の

レベルで低かった冠詞の付いた名詞句の出現率がレベル上昇に従って増加するという結果を得た。

表2. Chaudron & Parker's Table 6 (1990:54)

Structural markedness scale results (free production results in percentages by level group)

Group	Null	Bare Noun/ Pronoun	Noun + Ex/L-D	Noun + Def/Indef Art.	Noun+Ex/L-D +Def/Indef Art.
Low	—	60.2	—	39.8	—
Middle	—	57.3	2.4	37.8	2.4
High	—	41.6	—	53.2	5.2
Native	0.7	23.0	0.7	67.1	8.6

冠詞も助詞も名詞句をマークする機能語であり、Chaudron & Parker (1990) でも本論文でも、名詞句がTLにおけるように機能語を伴って現れるか、機能語脱落の形として現れるか、あるいは、空項として現れるかということが問題になっているので、Chaudron & Parker の提唱する構造的有標性というものは、(10) の仮定を支える助詞使用の回避という現象の説明にも適用することができると思われる。つまり、日本語にも(12)に示すような構造的有標性があり、それが助詞習得に影響を及ぼしていると考えられる。

(12) 構造的有標性

有標性が低い		有標性が高い
空項	< 助詞脱落形	< 助詞によりマークされた名詞句

(11b)に掲げた各因子の従属変数(助詞マーキングされるかどうか)に対する比重(factor weight)を調べるために、中間言語における変異(variation)を探るために開発されたVARBRULという統計プログラムを使用した。VARBRULに関してはYoung & Bayley (1996)を参照されたい。今回は、Macintosh用に開発されたGoldVarb 2.1 (D. Sankoff, R. Rousseau, D. Hindle & S. Pintzuk 1992)を使用した。

NNSの1820の項と、NSの1678の項をそれぞれ別々に分析したところ、統計的に有意な数値が出て、独立変数の従属変数に対する影響についての帰無仮説は棄却された(NNS: df = 4, Chi-square = 14.8267, p < 0.01; NS: df = 4, Chi-square = 15.3620, p < 0.01)。

ここで特に注目したいのは、文法機能「目的語」と意味機能「対象」の助詞マーキングに対する因子比重(factor weight)である。VARBRULの因子比重は0から1まで変化し、0はrule application(この場合は助詞マーキング)が絶対に行われなことを、1はそのrule applicationが必ず行われることを示し、0.5は何の影響も及ぼさないことを示す。表3・4にあるように、NNSもNSもともに「対象」の因子が最も高い因子比重を示し、「目的語」の因子が2番目に高い因子比重を示している: 対象の因子比重はNNSも

NSも0.645であり、目的語の因子比重は、NNSが0.559であり、NSが0.603であった。このことから、第1に、NNSの名詞句の助詞マーキングは、NSと同様に、目的語よりも対象という因子から大きな影響を受けることがわかった。第2に、対象の因子比重がNNSもNSも同じく0.645で最も高かったのに、NNSの目的語の因子比重が0.559でNSのそれ(0.603)に及ばなかったことから、特に、学習者にとっては、目的語であるという因子よりも、対象であるという因子のほうが助詞マーキングに大きな影響を及ぼしていると考えられる。

表3. VARBRULによるNNS因子比重分析結果

・ BINOMIAL VARBRUL, 1 step · 98. 10. 10 · 4:14 PM
 Name of cell file: NNSp-marked. Cel Using fast, less accurate method.
 Averaging by weighting factors. One-level binomial analysis
 Run # 1, 9 cells: Iterations: 1 2 3 4 5 6 7
 Convergence at Iteration 7 Input 0.270

	Group	Factor Weight	App / Total	Input & Weight
1:	n (初級)	0.334	0.19	0.16
	l (初中級)	0.520	0.31	0.29
	m (中中級)	0.570	0.37	0.33
2:	o (目的語)	0.559	0.47	0.32
	s (主語)	0.477	0.25	0.25
3:	t (対象)	0.645	0.42	0.40
	e (外項)	0.241	0.10	0.11

Cell	Total	Applications	Expected	Error
nst	178	37	41.971	0.771
nse	138	7	7.065	0.001
not	87	31	26.087	1.322
lst	223	90	89.001	0.019
lse	219	33	22.777	5.121
lot	161	66	77.230	3.139
mst	289	134	129.714	0.257
mse	267	23	33.265	3.618
mot	258	143	136.893	0.580

Total Chi-square = 14.8267 Chi-square/cell = 1.6474 Log likelihood = -990.074

表4. VARBRULによるNS因子比重分析結果

・ BINOMIAL VARBRUL, 1 step · 98. 10. 10 · 6:40 PM
 Name of cell file: NSp-marking. Cel Using fast, less accurate method.
 Averaging by weighting factors. One-level binomial analysis
 Run # 1, 9 cells: Iterations: 1 2 3 4 5 6 7
 Convergence at Iteration 7 Input 0.345

	Group	Factor Weight	App/Total	Input & Weight
1:	n (初級)	0.515	0.37	0.36
	l (初中級)	0.482	0.37	0.33
	m (中中級)	0.504	0.40	0.35
2:	o (目的語)	0.603	0.59	0.44
	s (主語)	0.455	0.29	0.30
3:	t (対象)	0.645	0.51	0.49
	e (外項)	0.229	0.12	0.14

Cell	Total	Applications	Expected	Error
nst	171	72	78.520	1.001
nse	183	18	22.286	0.938
not	137	94	83.123	3.619
lst	212	83	90.295	1.027
lse	178	23	19.243	0.822
lot	163	97	93.583	0.293
mst	232	118	103.879	3.476
mse	193	23	22.576	0.009
mot	209	110	124.499	4.176

Total Chi-square = 15.3620 Chi-square/cell = 1.7069 Log likelihood = -964.443

最後に、出現形の比率を表5に示した。全体的に空項の率がNNSの初級から中中級にかけて減少していることがわかる。外項はNSでもNNSでも殆どが空項として出現しているが、対象項に注目すると、NNSにおいてレベル上昇にともなう空項と助詞脱落の率の減少とハ・マーキングや格助詞（「ヲ・ガ」）マーキングの率の増加が見られた。

表5. 意味機能別 出現形の分類 (%)

レベル		外項 (動作主・経験者)					対 象 項				
		空項	脱落	ハ	ヲガ	その他	空項	脱落	ハ	ヲガ	その他
N N S	初 級	33.8	0.8	1	0	0.2	38.3	11.5	7.9	5.6	1
	初中級	30	1	4.2	1.4	0.3	26.6	10	9.9	13.2	3.5
	中中級	28.2	1.2	1.8	0.6	0.5	24	7.5	12.2	18	6
N S	初 級	33	0.9	1.9	0.9	0.5	24.9	3.8	13.1	18.7	2.1
	初中級	27.8	0.2	2.1	2.3	0	33.6	2	10.4	18.2	3.4
	中中級	26.4	0.4	1.3	1.6	0.5	27.1	6.3	12.5	18.8	5.1

5. 結 論

正用率に基づいた正用順序・学習難易度を示した先行研究から、助詞習得に影響を及ぼす要因として談話上の機能「主題性」と文法上の機能「目的語」と意味上の機能「対象」の3種類を取り出し、そのうちどの要因が最も大きな影響を及ぼすかを検証した。主題性

に関しては総記の「ガ」を使う文脈でも主題の「ハ」使うという誤用が中上級になっても多く見られることから、学習者が主題性と助詞「ハ」の用法を結び付けているという捉え方には疑問が残るとし、本研究では文法的機能「目的語」と意味的機能「対象」の2点に焦点をあてて、どちらが助詞習得に対しより大きな影響を及ぼすかを調べた。

3レベル（ACTFLによる初級、初中級、中中級）の英語母語の日本語学習者12名の発話と日本人OPI採点者の発話中の、動作主・経験者・対象の3種類の項がどのような頻度でどのような音形として出現するか調べた。レベル別のNNSとNSの助詞マーキングを比較したところ、NSにおいてはレベルとは関係なくほぼ同じ割合の項が助詞マーキングされていた。一方、NNSの場合は、初級の助詞マーキング率が非常に低く、初中級を経て中中級に至り初めてNSと同じ率の助詞マーキング率に至った。対象項対外項の割合や目的語対主語の割合は、どのレベルでもほぼ同じであったことから、面接者と被面接者という立場の違いとは関係なく、大体同じ率の項が助詞マーキングされるはずだが、初級の学習者は助詞使用に習熟していないことからその使用を回避するという仮定は支持されたものと思われる。

さらに、VARBRULを用いて目的語であるという因子と対象項であるという因子の因子比重を比較したところ、対象の因子比重がNNSもNSも同じ値で最も高かったのにもかかわらず、NNSの目的語の因子比重はNSのそれに及ばなかった。つまり、特に学習者にとっては、目的語であるという因子よりも、対象であるという因子のほうが助詞マーキングに大きな影響を及ぼしていることがわかった。

最後に、出現した音形別に比率を出してみたところ、初級のNNSは、(NS同様)外項が殆ど空項として現れ、また対象項も殆ど空項あるいは助詞脱落の形で現れた。つまり、初級のNNSの発話には助詞マーキングが非常に少なかった。しかし、レベル上昇にともない、対象項において空項と助詞脱落の率が減り助詞マーキングの率がNSレベルに近づくのが見て取れた。

以上から、先行研究において指摘された「状態述語」の目的語の「ガ」の難易度が低い(坂本 1990)ということと、ヲ格のほうがガ格よりも正用順序が高い、あるいは目的語のガ格のほうが主語のガ格よりも正用順序が高いということは、対象項が助詞習得に影響を及ぼすということの特に反映させた結果ではないかと思われる。

注

- 1) 格と文法機能と意味役割の関係に関しては柴谷1978をされたい。
- 2) 対象項が動作主／経験者と異なる言語現象を示すことについては、例えば Baker 1988 に詳しい。国研1977では次のように「対象」を定義している：「動作・作用・思考の対象」（国研1997:109）、あるいは「形容詞・形容動詞・体述語（名詞＋陳述辞）および自動詞のガ格に立つ語で＜動作主＞＜経験者＞のいずれにも該当しないもの」（国研1997:97）。
- 3) 平成10年度文部省科学研究費補助金・基盤研究（A）（1）「第2言語としての日本語の習得に関する総合研究」研究代表者：カッケンブッシュ寛子、課題番号08308019により収集されたデータの一部を使用した。
- 4) 本研究では、主文により束縛されている空項および不定詞（infinitive）節内の空項主語は数えなかった。

参考文献

- 井内麻矢子（1995）「初級日本語学習者による助詞『は』『が』『を』の習得過程」『言語文化と日本語教育』9、pp. 246～256 お茶の水女子大学日本語言語文化研究会
- 猪崎保子（1995）「中国人日本語学習者にみられる助詞の習得について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』21号、pp. 15～27 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 石田敏子（1991）「フランス語話者の日本語習得過程」『日本語教育』75号、pp. 64～77
- 大嶋百合子、B. マックウィニー（編）（1995）『日本語のためのCHILDESマニュアル』マッギル大学
- 久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店
- 国立国語研究所（1997）『日本語における表層格と深層格の対応関係』三省堂
- 小森早江子・坂野永理（1988）「集団テストによる初級文法の習得について」『日本語教育』65号、pp. 126～128
- 坂本正（1997）「第二言語習得研究と日本語教育－助詞『は』と『が』について－」真紀・ハバード、坂本正、ジェームス・デーヴィス編『日本語教育：異文化の懸け橋』pp. 175～189 アルク
- 坂本正・町田延世・中窪高子（1995）「超上級日本語話者の発話における誤りについて」*Proceedings of the 6th Conference on Second Language Research in Japan*, pp. 66～94, The International University of Japan
- 柴谷方良（1978）『日本語の分析』大修館書店

- 田村泰男 (1994) 「日本語上級学習者の『が』『は』の使い分けに関する理解度について—単文中で主語をマークする場合—」『広島大学留学生センター紀要』 4、pp. 41~48
広島大学留学生センター
- 中川良雄 (1995) 「日本語助詞習得似関する—考察—CAIによる学習履歴の分析—」『無差』 2、pp. 63~79 京都外国語大学日本語学科
- 花田敦子 (1994) 「外国人の『は』『が』の習得について」『日本語教育論文集』 6、pp. 27~43 福岡YMCA
- 松田由美子・斉藤俊一 (1992) 「第2言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』 第2号、129~156、国際交流基金日本語国際センター
- 八木公子 (1996) 「初級学習者の作文にみられる日本語の正用順序：助詞別、助詞の機能別、機能グループ別に」『世界の日本語教育』 6、pp. 65~81 国際交流基金日本語国際センター
- 山内美恵子 (1993) 「中間言語の記述的研究(1)—格助詞「が」の場合—」『神戸大学留学生センター紀要』 第1号、pp. 61~76 神戸大学留学生センター
- 横林宙世 (1995) 「中級・上級学習者の発話に現れる助詞」『国際言語文化研究』 1、pp. 125~140 鹿児島純心女子大学国際言語文化学部
- 横林宙世 (1994) 「中級・上級日本語学習者の中間言語—助詞習得を中心に—」『平成6年度日本語教育学会春季大会』 pp. 7~12
- Baker, M. (1988) *Incorporation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Chaudron, C. & K. Parker. (1990) "Discourse markedness and structural markedness," *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 43-64.
- Doi, T., & K. Yoshioka. (1987) *Which grammatical structure should be taught when? Implications of the Pieneman-Johnston model to teaching of Japanese as a foreign language/second language*. Paper presented at the 9th HATJ Conference on Japanese Language and Linguistics, Honolulu.
- Doi, T., & K. Yoshioka. (1990) "Speech processing constraints on the acquisition of Japanese particles: Applying the Pienemann-Johnston Model to Japanese as a second language," *Proceedings of the 1st conference on second language acquisition and teaching* 1, 23-33, the International University of Japan (IUJ).
- Fukada, M. (1993) "Head government and case marker drop in Japanese," *Linguistic Inquiry* 24, 168-172.
- MacWhinney, B. (1995) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*, 2nd ed. Hillsdale: Lawrence Erlbaum.
- Masunaga, K. (1988) "Case deletion and discourse context." In W. J. Poser, ed.,

- Papers from the second international workshop on Japanese syntax*, 145-156.
Stanford, Calif. : CSLI.
- Rand, D. & D. Sankoff. (1990) GoldVarb Version 2: A Variable Rule Application for the Macintosh™. Centre de recherches mathématiques Université de Montreal.
- Sakamoto, T. (1993) "On acquisition order: Japanese particles WA and GA," *Proceedings of the 4th conference on Second Language Research in Japan*, 105-122. IUJ.
- Schachter, J. (1974) "An error in error analysis," *Language Learning*, 24, 2, 73-107.
- Yagi, K. (1992) "The accuracy order of Japanese particles," 『世界の日本語教育』第2号、pp. 15-25、国際交流基金日本語国際センター
- Young, R. & R. Bayley. (1996) "VARBRUL analysis of second language acquisition research." In R. Bayley and D. R. Preston, eds., *Second Language Acquisition and Linguistic Variation*, pp. 253-306. Amsterdam: John Benjamins.
- Yoshioka, K. (1991) "Elicited imitation test for oral production assessment," *The Language Programs of the International University of Japan Working Papers*, Vol. 2, pp. 127-140. IUJ.